令和３年８月24日

◆　甲子園からの贈り物　◆

昨年は、大会そのものが中止という事態に追い込まれたが、今年の甲子園は、コロナ禍による様々な制約に加え、連日の降雨により異例のノーゲームやコールドゲームという試合結果になることもある厳しい状況の中、熱戦が繰り広げられている。この「校長メッセージ」でも、本校野球部についてその都度拙稿を掲載させていただいてきたけれど、全国の多くの球児が、一戦一戦、この場所を目指して全力を注ぎ込んできただけに、全試合が数々の思い出に彩られる。あれが抜けていたら…、あそこでこういったプレーになっていたら…、などと試合のたび毎に複雑な思いにとらわれてしまう。

そんな中での、近江（滋賀）対日大東北（福島）戦（8月20日）。

前日は降雨のためノーゲームになっていた。

日大東北の投手、吉田達也君（３年）は連日の先発登板となった。初回に相手打者の打球が右足を直撃した。わずか３球で降板。

継いだのが、星拳翔君（３年）。急遽の登板だったこともあるのだろう、牽制の悪送球をきっかけに失点し、本塁打も打たれる。朝日新聞にこうある。

「小さい頃から周囲とぶつかってきた。おかしいと思ったら、黙っていられず、友だちとけんかになることも。マウンドでも災いした。ミスが出たり、調子が悪かったりすると態度に出た。宗像忠典監督は根気よく叱ってくれた。（中略）もうふて腐れない。救援してくれた1年生の堀米涼太のもとへロージンバッグを届けるなど、チームを支えた。」

こんなドラマが多くの学校で、多くのチームで繰り広げられているのだろう。「学校教育の一環」としての部活動の一つの理想を見るように思う。

新聞記事の最後はこう結ばれている。

「「高校生は3日で変われる」。宗像監督によく言われた。この2年半で自分も変われた気がしている。進学し、教員免許の取得をめざす。難しさを抱える子どものそばで働きたいから。」

23日には女子高校野球の決勝も行われた甲子園。多くの若者がここを目指す理由は、こんなところにもあるのかもしれない。（引用：８月21日付け 朝日新聞15面　「はま風」）